

ねりま健育会病院

症 例 概 要 患者：30代 男性

病名：左被殻出血(86ml)

入院期間：平成30年11月～平成31年4月

外来期間：平成31年5月～現在に至る

経過：平成30年10月に右片麻痺、意識障害、失語症でA病院に転院。降圧、止血療法施行も、血腫増大。定位的血腫除去術施行。意識レベルは軽快も、失語症と右片麻痺は残存し、ご家族の強い希望があり、11月に回復期リハビリ目的で当院入院した。6か月後、日常生活の安定したため自宅退院し、復職に向けて外来リハビリを開始。元々はSEであり、復職がうまくいかず一旦退職となったが、外来PT、OT、STを継続し、就労支援センターとも連携し、令和4年1月より障害者雇用枠での採用が決まり、復職となった。

内 容

入院時は、体格が非常に大柄で（身長約180cm、体重約90kg）、JCSI-3、重度失語のため発語はなく、協力動作はあるものの全般的に重介助を要していた。入院時の脳画像でもまだ58mlの出血が残存していた。FIMは運動項目26、認知項目12の38であり、わずかに協力動作がある程度の全介助レベルであった。

初回カンファレンスでは、予後予測が難しいなかで、目標を「6か月間の入院で再発予防、随意運動が向上し、屋内外歩行修正自立、ADL修正自立、認知・高次脳機能の改善、発語での意思疎通」とし、当院での回復期リハビリテーションを開始した。

退院時の患者さんの様子としては、JCSは正常化、体重は15kg減となった。単語レベルの発語は可能となり、経口摂取自立した。ADLも入浴含め、自立～修正自立を達成した。屋内移動は装具使用しフリーハンドにて自立、屋外移動は装具杖使用し公共交通機関も含め自立となり、自宅退院を達成。FIMは運動項目84、認知項目27の111となった。退院後に関しては、当院の外来リハにて継続的にフォローを行っていくこととなった。

外来で、はじめは重度失語、歩容の改善、上肢機能改善を目的に、週にPT・OT・STにて2回フォローを開始した。通院も公共交通機関を利用し自立となり、職場復帰も目指したが、元の仕事はSEで、高次脳機能障害と失語の影響と会社都合もあり、退職となってしまった。しかし、本症例はまだ若く、今

後の社会参加のためにも、復職を目標として支援を継続していく方針となった。

徐々に生活も安定し活動範囲も拡大し、外来リハと並行して所沢にある他の復職養成機関に通い始めることとなった。外来リハの頻度を減らしながらも、その養成機関とも連携を取りながらご本人が就職ができるように支援を継続した。途中、より具体的、現実的な復職支援のため、高次脳機能障害に特化した就労支援センターへの移行を支援し、当施設としても連携を行いながらあきらめず復職に向けて介入を行っていった。

結果、令和4年度1月より、一般企業に障害者雇用枠での再就職が決まり、復職の目標を達成することができた。

入院中は重度の麻痺と失語があり、復職に向け、コミュニケーション障害が大きな課題だったが、時間をかけながら徐々に短文、長文での会話も可能となった。一度は退職となりましたが、ご本人もご家族も復職に対してあきらめず、努力を怠らず、チームとしても社会資源とも適切に連携し継続した支援を行ったことが、3年経過した中で復職につながったと考える。現在の仕事は、封筒に書類を詰める作業や簡単なパソコンの入力作業を実施している。入院のみならず、外来リハとして継続して支援していくことの意義、そして復職支援センターなど地域の資源との連携の重要性を改めて認識することができた症例であった。ご本人、ご家族も非常に喜ばれていましたが、ご本人の目標としてSEになることであり、今後ご本人の目標に向かって引き続き支援していきたい。